

海外事務所
だより

マンチェスターにおける
混雑賦課金制度について

ロンドン事務所所長補佐 木村 誠希 (東京都派遣)

ロンドン事務所

イギリスにおいては、マンチェスターにおける混雑賦課金制度(以下、コンジェスチョン・チャージ)の導入が検討され、現在議論を呼んでいます。導入は二〇一三年の予定ですが、導入されれば二〇一三年のロンドンでのコンジェスチョン・チャージに続きイギリスでは二例目となります。以下、ロンドンでの実施状況を踏まえながら、マンチェスターでの状況、将来の方向性について報告します。



↑ロンドンのコンジェスチョンチャージ対象地域

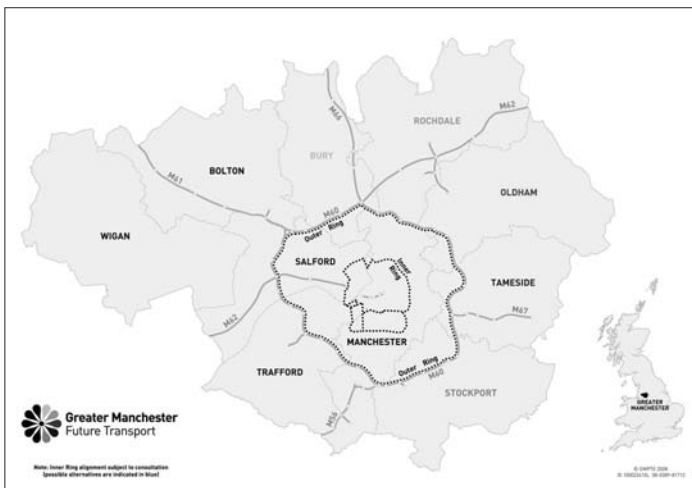
制度の概要

本件コンジェスチョン・チャージは、マンチェスター市を中心とする一〇市で構成され

るグレーター・マンチェスター地域の中心地街を走行する車について一日で最高五ポンドの料金を課すという制度です。導入の主な目的は、市街地での渋滞緩和そのものに加えて、コンジェスチョン・チャージを課すことで得た資金を鉄道網などの公共交通機関の改善に利用することにあります。本件ではコンジェスチョン・チャージの課金と公共交通機関への投資は一つのパッケージとして捉えられています。実施主体は、マンチェスター市をはじめ一〇の地方自治体で構成される「グレーター・マンチェスター地方自治協会」と、当該一〇の地方自治体によって設置された「グレーター・マンチェスター旅客運輸委員会」です。

賦課されるのは、月曜から金曜の、午前七〜九時三〇分までに市街地へ向かう車、午後四〜六時三〇分までに市街地から出る車です。オートバイについては混雑への影響が自動車よりも低いことを理由に、賦課対

象から除外するか、あるいは自動車よりも低い金額を課すことが検討されています。自転車、タクシー、バス、緊急車両、身体



↑マンチェスターのコンジェスチョン・チャージ対象予定地域

障害者用の自動車などは賦課対象外となる見込みです。

賦課された料金の支払い方法については、事前に登録した機材を車に備え付け、設定されたラインを超える際に認識、賦課され、前払い分から自動的に差し引かれる仕組みが検討されています。

ロンドンとの比較

マンチェスターの対象地域については、マンチェスター市の中心部のみ内環および郊外部分も含めてより広い地域をカバーする外環の二つが設定される予定です。一方ロンドンでは、市中心部のみが対象であり、マンチェスターでのコンジェスチョン・チャージの方が広い地域が対象となります。シンガポール、ローマ、ストックホルムなどでもコンジェスチョン・チャージ類似の制度がありますが、マンチェスターの対象地域が世界最大となる見込みです。

賦課対象時間については、マンチェスターにおいては前述のように、月曜から金曜の午前七〜九時三〇分まで、また午後四〜六時三〇分までとより限られた時間のみが対象であり、通勤および帰宅時間帯の混雑解消を主な狙いとするものです。一方ロンドンにおいては、月曜から金曜の午前七〜午後六時までに対象地域に入った自動車および対象地域内で移動した自動車に課されています。

賦課される金額については、マンチェスターで計画されている方式では、朝に外環を越えて対象地域に入る際に二ポンド（夕方は対象地域を出る際に一ポンド）が課されます。さらに朝に内環を越えて対象地域に入る際に（夕方は対象地域を出る際に）一ポンドが課されます。ただし対象地域内のみで移動する場合には賦課されません。例えばマンチェスター郊外から市中心地に自動車通勤する場合、一日五ポンドが課されることとなります。また商業用の自動車などで何度も対象地域を出入りする場合は、一日の上限額として一〇ポンドが課される仕組みとする予定です。一方でロンドンにおいては原則として一日八ポンドが課されていますが、割引制度もあり、電気自動車の利用や対象地域内の住民（対象地域内のみ移動にも賦課されるため）などには低い料金が課されています。

また、ロンドン、マンチェスターともコンジェスチョン・チャージによって得た資金を公共交通機関改善のために利用するという点では同じです。ただし、ロンドンにおいては徴収した資金の中から公共交通機関改善のための投資に回すのに対して、マンチェスターにおいては先に公共交通機関改善のための投資を行い、この投資した資金の回収手段としてコンジェスチョン・チャージが位置付けられている点が異なります。

マンチェスターでの公共交通機関改善のための投資額は今後総額で二〇億ポンド（約

六三〇〇億円）となることが見込まれています。このうち主な資金源としては、政府からの補助金が一五億ポンド（約三二五〇億円）、政府からの貸付金が一二億ポンド（約二五二〇億円）を占めています。貸付金の部分をコンジェスチョン・チャージから得た資金でおよそ三〇年間かけて返済する計画です。

ロンドンでの現状と問題点

ここで、マンチェスターに先んじて二〇〇三年に同様の制度を導入したロンドンの状況を確認したいと思います。

ロンドン交通局によると、コンジェスチョン・チャージ導入後は対象地域内への自動車の利用が二二%減少したと報告しており、渋滞の緩和には一定の効果を上げているようです。

ただし、ロンドン商工会議所によると、対象地域内の一部の企業や商店において、買い物客が減少したことによる売上減と、商品の輸送コスト上昇のために重大な影響を受けているケースも存在するようです。

またロンドン交通局の二〇〇六〜二〇〇七年度の報告書によると、ロンドン市がコンジェスチョン・チャージで得た金額は二億五〇〇〇万ポンド（約五二五億円）ですが、このうち半分強がコンジェスチョン・チャージ制度自体の運営のために費やされています。これはCCTVと呼ばれる各所に設置した監視



↑中心街での混雑状況

視カメラを通して、ナンバー・プレートの確認と登録された車両データベースの照合を行っており、設備維持費や人件費などがかかるためです。

ロンドンにおいても、コンジェスチョン・チャージで得た資金を利用し、地下鉄、バスなどの公共交通機関を改善することを目指していますが、維持コストが高く、公共交通機関の改善のために利用することのできる資金は限定されていると言えます。実際に、ロンドンでのコンジェスチョン・チャージの導入後に、地下鉄やバスの遅延が大幅に解消されたという声はあまり聞きません。

また、前ロンドン市長の下で環境への負荷が大きい大型車については一日二五ポンドを課すことおよび対象地域を西部へさらに拡張することが計画されていました。しかし、二〇〇八年五月に当選した新市長は、市長選での公約どおりに、この賦課金額を上げる計画を廃止すると発表しました。また対象地域の拡張についても慎重な姿勢を見せています。

今後の動きについて

「グレーター・マンチェスター地方自治協会」を構成する一〇の地方自治体では、既に七の地方自治体がコンジェスチョン・チャージに賛成する意思を表明しています。一方で三つの地方自治体が反対を表明しています。特に市街地から離れた地域では、コンジェスチョン・チャージから得た資金のほとんどが中心部の公共交通機関の改善のために費やされ、メリットを享受できないとして反対の声が強い状況です。グレーター・マンチェスター地域の地方自治体の集合体である「グレーター・マンチェスター地方自治協会」においては、構成する一〇の地方自治体のうち七以上をもつて多数意見とすることと定めており、コンジェスチョン・チャージの導入に向けて進めることには制度上の問題はありませぬ。今後は「グレーター・マンチェスター地方自治協会」において、内環、外環を具体的にどの場所に設定するか、また賦課対象外と

する車の種類などに関する詳細な審議・決定が順次行われることが予定されています。

一方で、BBCがマンチェスター地域で二〇〇八年六月に実施した世論調査によると、六二％が導入に反対しており、八六％が住民投票を求めているという結果が出ました。反対の主な理由として、ガソリン価格高騰による負担に加え、コンジェスチョン・チャージ導入によってさらに自動車利用のコストが高くなることが挙げられました。

また野党保守党も導入に反対しています。五月の統一地方選挙での労働党の敗北を受けて、労働党優勢の地方自治体であっても強硬に導入したのでは住民の支持をさらに失う恐れがあるため、導入手続きを進めることをためらっているというのが現状です。そこで、二〇〇八年六月に労働党の中央政府も、コンジェスチョン・チャージを導入することになった場合は、マンチェスターの交通公共機関の改善のために一億五〇〇〇万ポンド（約三二五億円）の資金援助を行うと表明し、コンジェスチョン・チャージ導入の後押しを行いました。今後は住民からの反発をできるだけ抑える形で、導入に向けて動くことが見込まれています。二〇一〇年までに下院選挙が実施される見込みであり、導入に賛成の労働党と、導入に反対の保守党との支持獲得に向けた駆け引きにより、マンチェスターでのコンジェスチョン・チャージ導入に向けた調整は難航する模様です。

海外生活 だより

ロンドン事務所

癒しのロンドン・ 活力あるロンドン・

ロンドン事務所所長補佐

松野下 良子（徳島県派遣）

ロンドンに赴任して、早くも三カ月が過ぎようとしています。こちらで過ごす時間は、日本で過ごす時間とはやはり違っていきます。そこで今回は、ロンドンでの生活を始めた私が、特に日常生活の中で印象深く感じたことについて書いてみたいと思います。

さて、日本人にとってのロンドンの物価の高さもさることながら、ロンドンの市街地を歩いていてまず最初に驚いたことが、意外にも英語があまり聞こえてこないということでした。代わりに本当にいろいろな言語が飛び交っています。ここロンドンで、もし行き交うそれぞれの人に出身国を尋ね、世界地図に印をつけていくならば、一日に出会う人の数だけでどれだけの国がマークされるだろうか。そんなことをつい考えてしまいます。それほどにロンドンは外国人によって成

り立っている都市と言えます。最近の新聞によって発表された数字によれば、昨年過去最多の外国人がイギリス人として登録されています。それは前年より七%の増加で、およそ二〇万人がイギリス人になったということですが。統計から見ると、私が最初にロンドンのまちに対して驚いたことは不思議ではないのかもしれませんが、自分が外国人であることを全く感じさせないロンドンは、やはりどこか魅力的です。貴族社会である一方で、これほどの人種を受け入れている面を持ち合わせており、この大都市に潜む何か潜在的パワーを感じずにはいられません。例えば、ロンドンの地下鉄構内には、バスカーと呼ばれる地下鉄ミュージシャンがいますが、彼らの演奏の質の高さ一つとってみても、ロンドンのパワーをひしひしと感じます。現在は、四〇〇人ほど登録された若手音楽家

がいるということですが、このバスカーはオーディションで選ばれた実力派ばかり。彼らの演奏は、ロンドンの地下鉄構内の狭く、暗い雰囲気をもくもくしています。世界一流のミュージアム、ミュージカル、クラシック音楽、歴史を物語る古い建物など、ロンドンのパワーはあらゆる所に存在しています。またこれほどの外国人を受け入れているにもかかわらず、それでも決してイギリスらしさは失われておらず、逆に凛としたイギリスという誇りを感じさせる何かがあるから不思議です。それはきっと、この国の深く長い歴史そのものと関係しているのでしょう。



↑トラファルガー広場前

しかし、こちらで生活をしていると、日本人の感覚では理解しがたいことも時として起こります。文化、歴史、生活様式、宗教などの違いからくる感覚とでもいうのでしうか。これもこちらでしか味わえない貴重な感覚だとすれば、このさまざまの違いを自分で直接感じ取りながら、まずはそれぞれを偏見、差別なく受けとめられるような器をこの赴任期間中大きく育てていきたいと思えます。同時に、もっとイギリスという文化、歴史に触れながら、その中でどのように制度的なものが機能しているのか併せて見ていくつもりです。

ところで、ロンドンの天気は実に移り変わりが激しいです。午前中はポカポカ日和で、もう夏に向かっていているのだなと思つた矢先、昼から次第に曇りだし、続いて雨が降り、夕方にはついに雪が降り始めたということもありました。よく言われていることではありますが、「ロンドンで一日に四季を体験できる」とは本当のことなのだと思感しています。それゆえに携帯の傘はどこへ行くのにも欠かせません。しかしその分、天気がよい日ともなると、太陽の光がこれほどまでにありがたいものかと感じます。そのためか、特に週末の天気の良い日には、日光を浴びなければならぬといった一種の義務感が働き、公園に行きたくなる衝動に駆られます。最近の私の週末の日課となっているのが、公園でゆったりと、何も考えない、何もしない時を過ごすことです。三六〇度

広がる広大な自然の中にいると、体の中に溜まっているものが自然と抜けていくようで、不思議とリラックスできます。芝生の上に大の字で寝転がり、空を眺める。雲の流れがとても速い日、ゆっくりと進む日、雲一つない青空の日。空が、そして自然が多くを語りかけてくれるように思えます。風に揺られる芝生の音、小鳥のさえずり、大きな木々が音を立て、そして葉っぱが風で揺すられる音。すべてのリズムが実に心地よいです。こちらで暮らす人々にとって、イギリスの公園は癒しの場となっているようです。週末には、広大な緑の芝生が人の群れで覆われます。家族連れ、カップル、老夫婦、スポーツを楽しむ若者、昼寝をする人、犬と散歩をする人、読書をする人、絵を描く人、ジョギングをする人、それぞれがそれぞれの思いのまま、

自然の中で自分の時間をゆつたりと過ごしてきます。ロンドンにはこのように、人々が長時間過ごすことのできる公園がたくさんあります。公園や



↑公園で思い思いの時間を過ごす人々

緑地で過ごすこと自体が、イギリス人の生活の一部となっているようです。

それではここで、ロンドンの公園に関する数字的なものを少し紹介したいと思います。ロンドンの公園面積は、約三二・五km²であり、都市総面積の約三九%が実に緑地帯と公園で占められています。また人口一人当たりの公園面積は、東京市民一人当たりの公園面積が約五・五km²であるのに対して、イギリスは二六・九km²であり、公園面積に約五倍近い差があることが分かります。この数字は実際に、われわれの生活空間に大きな違いをもたらしていると言えるでしょう。ここロンドンには、世界の大都市でありながらも、どこかほっとする、親しみやすさを覚えます。それは、一九九〇年以降都市開発が進み建設ラッシュを迎えたにもかかわらず、それでも依然として、広大な緑地帯が都心のあらゆる場所に広がっているからなのかもしれません。どんなに都市開発が進もうとも、緑は人々にとって不可欠なものとして残されてきました。よき自然を守り、緑地という空間を人々に提供し、景観を維持するといふイギリス人の意識の高さを感じることが出来ます。

イギリスの公園は、人々に心の余裕を与え、安らぎを与える都会のオアシス。ロンドン赴任中、このような自然の恩恵を受けながら感謝の心を忘れず、ロンドンの活力をこれからもどんどん伝えていきたいと思っています。